

英語と日本語における発話行為連鎖構成

— 相互行為ストラテジーの日英語比較 —

生 田 少 子

Abstract

In exploration of speech act sequence organization as an interactional strategy, this paper examines the similarities and differences between American English and Japanese speakers' normative use of directive speech acts in interaction. The analysis is primarily quantitative and is based on the analyses of the data obtained through a discourse completion test conducted in the United States and Japan, reported in Ikuta (2006) and Ikuta (2008) respectively. Focus is placed on an "interaction package/unit" which a speaker designs before launching into a new set of negotiation sequence in which he/she intends to pursue a directive speech act. It is demonstrated that, in such a negotiation sequence, speakers of both languages commonly use a sequence of different speech acts to mitigate the anticipated FTA, while the types of those acts and their arrangement within a sequence may vary between the languages.

1. 目 的

本論文は、言語ポライトネスを相互行為ストラテジーとの関連で捉える一連の研究(生田 2006, 2008)を踏まえて、英語話者と日本語話者による発話行為連鎖構成を比較分析する。これまでの研究から、英語および日本語についてそれぞれ発話行為連鎖構成(speech act sequence organization)がポライトネスにかかわる相互行為ストラテジーの一部となっていることが明らかになった

が、本論文ではそれら英語と日本語の分析結果を量的側面に絞って比較し、それぞれのインターアクションにおけるディスコース・パッケージ（インターアクション・ユニット）の構想および連鎖構成の特性を解明することを目的とする。

2. 背景

研究基盤としたのは、「相互行為ストラテジーはポライトネスと発話意図の遂行を共に目指すものであり、また、会話ディスコースの中で話者は特定の意図を遂行しようとする際、当該のディスコース・パッケージにおいて使用する表現形式および連鎖構成について、ある程度の構想を事前に描いている」という仮説（生田 2006）である。すでに行われた会話ではなく話者の事前の構想を対象とするため、使用したデータはインフォーマントに一種の談話完成課題を与えて収集したものである。

生田（2006）では英語の、生田（2008）では日本語のそれぞれの母語話者による「分別行動（politic behavior）」（Watts 2003）の基盤にあると考えられる規範的言語使用意識を探るため、社会的距離の異なる相手に対する指図型発話行為を核とする連鎖構成を分析した。それを基に、話者が当該発話行為を遂行するにあたって、独立した個々の発話行為の単なる連続ではなく、特定の意図を遂行する目的で一つのパッケージとしての構想・デザインを描いていること、および、それがポライトネス・ストラテジーに密接に関わっていることを論じた。

ポライトネス・ストラテジーとしては、「敬語的ポライトネス（honorific kind of politeness）」と「やり取りのポライトネス（transactional kind of politeness）」（Leech 2003）という観点からすると、発話行為連鎖構成は後者に属するものであると考えられる（生田 2006）。日英語とも敬語的ポライトネ

スに加え、やり取りのポライトネスがみられたが、英語において前者は顕著ではないものの「やり取りのポライトネス」に関わるストラテジーの定式化，すなわち敬語的ポライトネス化と考えられる現象がみられること，一方，日本語では敬語的ストラテジーへの依存度が大きいことも考察した。

3. データおよび方法

本研究は，アメリカと日本の大学生を対象とした談話完成課題により収集したデータに基づいている（設定課題については英語は生田 [2006]，日本語は生田 [2008] 参照）。話者が実際の会話ディスコースを行なう前にすでに構想していると考えられるインターアクション・ユニットのデザインを対象としているためである。

総回答者数はアメリカ 54 名，日本 56 名である。アメリカについては，英語以外の言語を母語とする 12 名および該当する回答の無かった 4 名を除く英語母語話者 38 名の回答を分析対象とした。日本の場合は 56 名すべてが日本語母語話者であった。ただし，設定課題にあった場面（Situation）⁽¹⁾ によっては該当する回答が無かった被験者もいるため，分析対象としたのはそれぞれ表 3.1. に示す通りである（回答者の属性その他については生田 [2006 および 2008] 参照）。

表 3.1. 状況別分析対象回答数⁽²⁾

	英語話者	日本語話者
総回答者数	54	56
Situation A 分析対象回答数	38	52
Situation B 分析対象回答数	35	43

表 3.1. から分かるように分析対象回答数にばらつきがあるので，比較を容易

にするため、次項以降に掲げる各表では実数のほか、項目ごとの該当回答数を基準（100%）としたパーセント値を括弧内に記してある。

生田（2006）および生田（2008）では上記データを基にそれぞれ英語話者と日本語話者による発話行為連鎖構成に関し質的かつ量的な分析を行ったが、本論文ではそれらの分析結果から量的側面のみに絞って両語の発話行為連鎖を比較考察する⁽³⁾。特に、英語話者と日本語話者の発話行為連鎖構成の観点からみたインターアクション・ユニットの構想に焦点をあて、そのようなユニットにおける複数の発話行為配列の言語による違いを考察する。

4. 分析

4.1. 英語話者と日本語話者にみられるターン連鎖と発話行為連鎖

英語話者による回答データ（生田 2006）と日本語話者によるもの（生田 2008）を比較すると、英語話者の場合は基本的に一ターンに一発話行為が出現する形で連鎖パッケージ（interaction unit）が構成されている。一方、日本語話者は単独のターン内で複数の発話行為を行なう傾向が顕著である。それらの発話行為は、話者が本来意図する発話行為（本研究の場合は指図型発話行為）の遂行のために、その前後に付随して遂行されるものと考えられる——つまり、前後の異なるターンである先行発話（pre-sequence）や後続発話（post-sequence）における発話行為と同様の機能を果たすものと考えられる。日本語話者は、意図する発話行為の遂行のために必要とする複数の発話行為の配置に関し、複数のターン連鎖をデザインする以外に、同一ターン内で複数の発話行為連鎖を行おうとする傾向があると言える。

以上から、ターン連鎖と発話行為連鎖は異なるものであると考える（この点については、第5項でさらに考察する）。したがって、本論文では、ターン連鎖と発話行為連鎖を区別して論じる。そのため、混乱を回避するために、以下

英語と日本語における発話行為連鎖構成

では従来 pre-sequence, post-sequence に対応する日本語の訳語として用いられている先行発話, 後続発話という用語の使用は避け, 次のような用語を用いる。

先行（後続）部分 — ターンにかかわらず, 当該ユニットにおいて意図された直接発話行為（本論文では指図型）に先行（後続）する部分全体

先行（後続）連鎖 — 当該ユニットにおいて意図された直接発話行為のあるターンに先行（後続）するターンの連鎖

先行（後続）発話行為 — 出現ターンにかかわらず, 当該ユニットにおいて意図された直接発話行為に先行（後続）する発話行為

先行（後続）発話行為連鎖 — 上記先行（後続）発話行為の連鎖

表 4.1.1. は英語話者の, 表 4.1.2. は日本語話者の指図型発話行為およびその遂行に付随して行われる発話行為について, それらの出現位置ごとの出現数と出現率を状況別に示したものである。

表 4.1.1. 英語：状況別発話行為の出現数・出現率

	該当総回答数	Pre-directives	Directives	Post-directives
Situation A	38(100%)	11(29%)	34(89%)	23(61%)
Situation B	35(100%)	5(14%)	31(89%)	17(49%)

表 4.1.2. 日本語：状況別発話行為の出現数・出現率

	該当総回答数	先行連鎖	同一ターン内先行発話行為	指図型発話行為	同一ターン内後続発話行為	後続連鎖
場面 A	52 (100%)	12 (23%)	35 (67%)	43 (83%)	1 (2%)	16 (31%)
場面 B	43 (100%)	6 (14%)	18 (44%)	36 (84%)	6 (14%)	14 (33%)

表 4.1.1. から, 英語話者の場合, 基本的に一ターンに一発話行為が出現しており, 一パッケージ (unit) が構成されていると言える。それに対し, 表 4.1.2.

から分かるように、日本語話者は一ターン内で複数の発話行為連鎖を構想しているものが多くみられるのである。

4.2. 対話相手による差異

表 4.1.1. および表 4.1.2. で、場面 A と場面 B を比較すると、英語話者、日本語話者ともに場面 B のほうが先行発話行為は少ないことが分かる。その要因としては、「依頼」や「質問」などの指図型発話行為をする際でも、近しい対話相手には FTA を緩和する必要があまり感じられていないということが考えられる。一方、社会的距離が比較的大きい相手に対してはその必要を感じる割合が高いということになる。このことから、発話行為連鎖構成（この場合は、先行発話行為を行なうこと）は日英語ともに「分別行動 (politic behavior)」の一環として機能する側面があるといえよう。ただし、そこで用いられる発話行為の種類は日英語間で違いもみられる (cf. 4.3.)。後続部分については、先行部分ほど対話相手による差異はみられない。また、日本語話者の同一ターン内後続発話行為は場面 A よりも場面 B の方に多く出現しているが、この点については後述する (cf. 4.5.)。

ちなみに本論文では対象としていないが、敬語的ポライトネスの典型といえる表現形式にみられる対話相手による差異について、本調査データから得られた知見を付け加えておくと、英語では場面 A と B (社会的距離の大小) の間で大差はみられないが、日本語では両状況に大きな差がみられた。「です」「ます」の有無である。また、場面 A には一貫して標準変種が用いられているのに対し、場面 B では地域方言も散見された。日本語話者の間には、地域方言と標準変種を社会的場面の「改まり度」(formality) や相手との社会的距離によって使い分ける傾向があることの反映であると考えられる。一方、英語話者についてはそれに対応するような現象はみられなかった (ただし、日本語は首都圏、英語はカリフォルニア州での調査である。回答データにみられる表現形

式についての詳細は生田 [2008] 参照)。

4.3. 先行部分の発話行為連鎖

4.3.1. 間接発話行為 — most preferred sequence

本調査の設定課題に用いた指図型発話行為は面子脅迫行為 (FTA) と考えられるものである。そのような発話行為を行わず (FTA を避けて) 先行発話行為が間接発話行為として機能し、結果として最も好ましい連鎖 (most preferred sequence) となる (cf. Levinson 1983) のは、本調査の場合、「分からない・理解できない」という内容の先行発話行為のみで情報要求の依頼・質問の発話行為の無いものである。

英語話者の回答では、Situation A で該当総回答数の 11%、Situation B で 6% にみられた (表 5.1.1.)。一方、日本語話者の場合は場面 A (17%) と B (16%) でほとんど差がみられない (表 5.1.2.)。この結果から、FTA を避ける戦略として、間接発話行為は日英語どちらにもみられるが、英語話者よりも日本語話者の方が間接発話行為を用いる率が高いということが分かる。また、英語話者は対話相手との社会的距離による使い分けがみられるのに対し、日本語話者にはそのような使いわけはほとんどみられないということが分かる。

4.3.2. 先行部分における発話行為の型と対話相手による差異

英語話者と日本語話者による先行部分における発話行為の型を状況別に示すと、それぞれ表 4.3.2.1. および表 4.3.2.2. のようになる。日本語話者の場合には先述のように、指図型発話行為と同一のターン内でそれに先行して他の発話行為がみられるので、表 4.3.2.2. にはそれも含まれている。

先行部分に用いられる発話行為の型については、表 4.3.2.1. および表 4.3.2.2. に示すように、「理由」型が日英語ともに多用されている。しかし、日本語では (儀礼的) 「謝罪」型もある程度みられるのに対し、英語では全くみられな

英語と日本語における発話行為連鎖構成

かった。日本語の場合、指図型発話行為と同一ターンにみられる発話行為も、主として先行連鎖にみられるものと同種の「理由」と「謝罪」の発話行為である。ただし、「謝罪」が用いられるのは場面 A に限られている。このことから、日本語では「謝罪」の発話行為を行なうことが敬語的ポライトネス化しているのではないかと考えられる。

表 4.3.2.1. 英語：状況別にみた先行部分の発話行為の型

	先行連鎖	
	Situation A	Situation B
該当部分総回答数	11(100%)	5(100%)
理由型	10(91%)	5(100%)
その他	1(9%)	0(0%)

表 4.3.2.2. 日本語：状況別にみた先行部分の発話行為の型

	先行連鎖		同一ターン内先行発話行為	
	場面 A	場面 B	場面 A	場面 B
該当部分総回答数	12 (100%)	6 (100%)	35 (100%)	18 (100%)
理由型	10 (83%)	6 (100%)	27 (77%)	14 (78%)
謝罪型	3 (25%)	0 (0%)	10 (29%)	0 (0%)
サモンス型	6 (50%)	2 (33%)	17 (49%)	4 (22%)
条件型	0 (0%)	0 (0%)	1*(3%)	1*(6%)
許可要求型	0 (0%)	0 (0%)	1 (3%)	0 (0%)

* 同一回答者

4.4. 直接発話行為

本調査の課題設定では、話者が最も直接的に意図を遂行しようとしていると考えられる発話行為は、「情報要求の依頼あるいは質問」の発話行為である。英語話者と日本語話者によるそのような指図型発話行為の型を設定状況別に示すと、それぞれ表 4.4.1. および表 4.4.2. のようになる。

英語と日本語における発話行為連鎖構成

表 4.4.1. 英語：状況別にみた指図型発話行為の種類

	Situation A	Situation B
該当部分総回答数	34(100%)	31(100%)
直接的質問	14(41%)	20(65%)
依 頼	16(47%)	5(16%)
命 令	0(0%)	2(6%)
そ の 他	4(18%)	4(13%)

表 4.4.2. 日本語：状況別にみた指図型発話行為の種類

	場面 A	場面 B
該当部分総回答数	43(100%)	36(100%)
直接的質問	7(16%)	17(47%)
依 頼	34(79%)	17(47%)
命 令	0(0%)	2(6%)
そ の 他	2(5%)	0(0%)

そのような直接発話行為に用いられる発話行為の種類は、日英語ともに「直接的質問」と「依頼」が大半である。対話相手による差異に注目すると、英語の場合、表 4.4.1. に示すように Situation A の社会的距離の大きい相手に対しては「直接的質問」と「依頼」がほぼ同率であるのに対し、Situation B では「直接的質問」が「依頼」の約 4 倍用いられていることが分かる。また、後者には命令形も少数みられる。表現形式としては“Could you～”で始まる疑問形が社会的距離のより大きい相手に対して典型的であった（生田 2006）。

日本語の場合は、表 4.4.2. に示すように場面 A の社会的距離の大きい相手には直接的質問型の発話行為は比較的少なく、依頼型が多く用いられている。場面 B では両者が同率である。ただし、発話行為自体は同種でも、場面 A と B で表現形式——主として授受動詞の種類のほか、サモンス、ヘッジ、疑問の終助詞——に顕著な差がみられた（生田 [2008] 表 4.4.3.3. および表 4.4.3.4. 参照）。

例えば、依頼型の表現形式としては場面 A ではほとんどが「～していただく」のような授受動詞と疑問の終助詞「か」を用いた質問形であり、形式上は敬語的ポライトネスの度合いが高い。場面 B ではより直接的な依頼で命令形もみられる。その他、相手との社会的距離による表現形式の違いとしては、先述したように「です・ます」の有無やヘッジの種類の違いが顕著であった（生田 2008）。

4.5. 後続部分の発話行為連鎖

後続部分すなわち直接発話行為に後続する部分にみられる発話行為の出現率については、すでに 4.1. で示した。対話相手による後続部分の出現率の差異をみると、英語の場合は表 4.1.1. に示した通り、特に Situation A（社会的距離が比較的大きい対話相手の場合）において後続連鎖の出現する割合が比較的高かった。日本語の場合は表 4.1.2. の通り、同一ターン内では場面 A よりも場面 B に多く、後続連鎖ではほとんど差は見られなかった。

英語および日本語の後続部分（直接発話行為に後続する部分）にみられる発話行為の種類を設定状況別に示すと、それぞれ表 4.5.1. および表 4.5.2. のようになる。それぞれ複数の発話行為が共起している場合も含まれている。先述した通り、日本語の場合は指図型発話行為と同一ターン内に後続する発話行為がみられるので、表 4.5.2. にはそれも含まれている。

表 4.5.1. 英語：状況別にみた後続部分における発話行為の型（共起を含む）

	Situation A	Situation B
該当部分総回答数	23(100%)	17(100%)
OK 型	15(65%)	12(71%)
Thanking 型	4(17%)	1(6%)
Positive assessment 型	10(43%)	2(12%)

英語と日本語における発話行為連鎖構成

表 4.5.2. 日本語：状況別にみた後続部分における発話行為の型（共起を含む）

	同一ターン内後続発話行為		後続連鎖	
	場面 A	場面 B	場面 A	場面 B
該当部分総回答数	1 (100%)	6(100%)	16(100%)	14(100%)
理由型	1 (100%)	6(100%)	0(0%)	0(0%)
依頼型	1 (上と共起)	0(0%)	0(0%)	0(0%)
感謝型	0 (0%)	0(0%)	2(4%)	1(7%)
評価型	0 (0%)	0(0%)	0(0%)	1(7%)
納得型	0 (0%)	0(0%)	15(94%)	8(57%)
応答型（間投詞）	0 (0%)	0(0%)	7(13%)	5(36%)

表 4.5.2. にみられるように、日本語話者による同一ターン内後続発話行為の種類はすべて理由型を含むものである。一方、後続連鎖における発話行為は主として納得型または応答型である。このように、日本語話者について同一ターン内後続発話行為と後続連鎖の型を比較すると、明らかな違いがあることが分かる。同一ターン内後続発話行為に用いられている発話行為の型はむしろ先行連鎖および同一ターン内先行発話行為にみられた発話行為の型と同様のものである。このことから、直接発話行為と同一のターン内で行なわれる発話行為は、その位置——すなわち直接発話行為に先行するか後続するか——にかかわりなく、英語話者による先行連鎖と同様の機能を果たすものであろうと考えられる (cf. 5.2.)。

そこで、表 4.5.1. と表 4.5.2. の後続連鎖部分のみに絞って比較することにする。どちらの部分も、課題設定では意図される指図型発話行為が遂行された（対話相手が「説明要求」に応えた）後の発話ということになるが、日英語に共通して明白な感謝型の発話行為は案外少ないことが分かる。日英語ともに多くみられるのは OK 型あるいは応答型と言えるような発話行為であり、相手との社会的距離を問わず多用されている。ただし、その表現形式をみると、英

語の方は対話相手により大差がないのに対し、日本語の方は応答型に用いられる間投詞に対話相手によって明らかな言語形式上の差異がみられた（生田 2008）。

表 4.5.1. にみられるように、英語話者データでは OK 型あるいはそれに類する種類の発話行為に次いで、ポジティブな評価型の発話行為が多い（その際にみられる表現形式としては、生田 [2006] で特に “sounds good” のような定式化されたポジティブな評価が多く用いられることを示した）。このような評価型発話行為は、特にアメリカ英語における感謝表現に特徴的なものと考えられる。例えば、Searle (1969: 151) は “To praise something is often or perhaps even characteristically to offer an assessment of it. But not just any kind of assessment; It must be a favourable assessment.” と述べている。表 4.3.1. から、そのような感謝表現としての評価型発話行為は、社会的距離の比較的遠い相手に対してより多く用いられるということが分かる。

一方、日本語の場合、評価型に該当すると言えるのは、社会的距離が近い相手に対する 1 例（7%）のみで、社会的距離の遠い相手に対しては全くみられなかった。日本語ではこのような場合、納得型あるいは応答型のような何らかの反応を示すことが定式化した行為であると考えられる。そのうち納得型は、表 4.5.2. のように場面 A の方、つまり社会的距離の大きい相手に対する方により多く用いられるということが分かる（その表現形式についてみると、「わかりました」・「わかった」のように、対話相手によって「です・ます」形の有無など明らかな差異がある（生田 2008）。この点からも、日本語話者の場合は発話行為の種類よりも表現形式即ち敬語ポライトネスによる戦略に依存する傾向が強いと考えられる）。

5. 考察

5.1. 連鎖構成パターン

英語と日本語について連鎖構成パターンを状況別に示すとそれぞれ表 5.1.1. および表 5.1.2. のようになる。

表 5.1.1. 英語：状況別連鎖構成パターン⁽⁴⁾

	Situation A	Situation B
該当総回答数	38(100%)	35(100%)
A (先行発話連鎖) のみ	1(5%)	0(2%)
C (指図型発話行為) のみ	10(26%)	14(40%)
A+E	3(8%)	2(6%)
A+C+E	3(8%)	2(6%)
A+C	4(11%)	3(9%)
C+E	17(45%)	14(40%)
E (後続発話連鎖) のみ	0(0%)	0(0%)
以上のうち、Cの無いもの (間接発話行為)	4(13%)	2(6%)

A：先行発話連鎖，C：指図型発話行為，E：後続発話連鎖

英語話者の場合、選好構造 (preference structure) として最も好ましい連鎖構成 (most preferred sequence) は、FTA の可能性がある指図型発話行為を避けて意図を遂行しようとする A+E および A のみという 2 つのパターンである。そのうち、相互行為のポライトネス (パッケージ全体のポライトネス) という観点から最も好ましい連鎖 (most preferred sequence) と考えられるのは A+E である (cf. 4.3.1.)。しかし、表 5.1.1. から、Situation A, Situation B ともに特に多かったのは C+E というパターンであることが分かる。課題の設定上では必須ではなかった後続連鎖部分がかなりの比率でみられ

英語と日本語における発話行為連鎖構成

表 5.1.2. 日本語：状況別連鎖構成パターン

	場面 A	場面 B
該当総回答数	52(100%)	43(100%)
a (先行発話連鎖) のみ	7(13%)	1(2%)
c (指図型行為) のみ	4(8%)	10(23%)
a+b+c	2(4%)	0(0%)
a+b+c+e	1(2%)	0(0%)
a+c	1(2%)	1(2%)
a+e	2(4%)	4(9%)
b+c	22(42%)	13(30%)
b+c+d	1(2%)	1(2%)
b+c+e	10(19%)	3(7%)
b+e	0(0%)	1(2%)
c+d	0(0%)	2(5%)
c+d+e	0(0%)	3(7%)
c+e	3(6%)	3(7%)
e (後続発話連鎖) のみ	0(0%)	0(0%)
以上のうち、c の無いもの (間接発話行為)	9(17%)	6(16%)

a：先行発話連鎖，b：同一ターン内先行発話行為，c：指図型発話行為，d：同一ターン内後続発話行為，e：後続発話連鎖

たことになり、相互行為戦略としての後続連鎖の機能を物語るものであろう。

日本語話者の場合は、表 5.1.2. から分かるように、b+c という同一ターン内先行発話行為と指図型発話行為の組み合わせが両状況とも多い。選好構造上最も好ましい連鎖は上述のように FTA の可能性がある指図型発話行為を避ける構成であるが、両状況ともその出現率に大差はない (cf. 4.3.1.)。このことから、社会的距離が小さい相手に対しても話者は複数の発話行為を組み合わせ

て指図型発話行為を遂行しようとしていると言える。また、英語話者は後続部分（後続発話連鎖）に、日本語話者は先行部分（特に同一ターン内先行発話連鎖）に依存する傾向があることが分かる。

以上のように、ポライトネス・ストラテジーの観点から最も FTA の度合いが低いとされる間接発話行為は、日英語ともさほど多くなかった。これは、談話完成課題の設定自体の影響もあると考えられる。一方、指図型発話行為（直接発話行為）のみの場合は、日英語とも社会的距離のある相手に対する場面 A よりも距離の近い相手に対する場面 B に比較的多くみられた。相手との社会的距離に応じて、予測される FTA を緩和するために、話者は意図する発話行為に付随して行う他の発話行為を調整しているということであり、発話行為連鎖が相互行為ストラテジーの一環として用いられていることを示すものである。

5.2. インターアクション・ユニットにおける発話行為連鎖

これまで特に日本語話者による発話行為連鎖でみられたように、ターン連鎖と発話行為連鎖は異なるものであり、区別して考える必要があることは明らかである。しかしながら、従来の英語を中心とする理論ではこれらは明確に区別されて論じられてこなかった。例えば Levinson (1983) では、pre-sequence 他の概念は基本的に一ターンが一発話行為の遂行に対応していることが前提となっており、上述したような日本語話者にみられる同一ターン内における複数の発話行為の遂行は想定されていない。従って、発話行為連鎖のあり方が英語と異なる日本語のような連鎖の特徴を記述するには、概念・用語およびその訳語が不明確である。そこで本論文では、先行発話、後続発話という訳語を避け、先行連鎖、先行発話行為、後続連鎖、後続発話行為などの用語を用いてきた (cf. 4.1.)。

上記に基づき、英語と日本語について一連のインターアクション・ユニット (IU) におけるターン連鎖と発話行為連鎖の関係を概念図であらわすと、それ

それ図 5.2.1. および図 5.2.2. のようになると考える。どちらの概念図も、本論文の対象である指図型発話行為を行なう側の話者（話者 A とする）のみのターンを示すものであり、図中では対話相手（話者 B）のターンは省略してある。また、本調査で用いた設定課題に即して、間接発話行為の場合は除き指図型発話行為（「説明要求の質問・依頼」など）が含まれると想定した場合についてのものであり、Turn 2 のあとは意図の実現・遂行すなわち相手（話者 B）による「説明・情報提供」が行われるという想定に基づいている。

$$IU \left\{ \begin{array}{l} \text{話者 A の Turn 1 : SA 1} \\ \text{話者 A の Turn 2 : SA 2 (指図型)} \\ \text{話者 A の Turn 3 : SA 3} \end{array} \right\}$$

図 5.2.1. 英語話者による発話行為配列 (SA=speech act)

$$IU \left\{ \begin{array}{l} \text{話者 A の Turn 1 : SA 1} \\ \text{話者 A の Turn 2 : SA 2 — SA 3 (指図型) — SA 2'} \\ \text{話者 A の Turn 3 : SA 4} \end{array} \right\}$$

図 5.2.2. 日本語話者による発話行為配列 (SA=speech act)

図 1 と図 2 に示すように、英語ではターン連鎖と発話行為連鎖は対応しているが、日本語の場合は両者に 1 対 1 の対応はない。図 2 において、同一ターン内後続発話行為について SA 2' と記したのは、その行為の内容（発話行為の型）が当該話者の次ターンにおける後続発話行為 SA 4 とは性質が大きく異なり、むしろ直接発話行為である SA 3 に先行する発話行為 SA 2 に近いことが明らかになったからである (cf. 4.5)。

6. 結 び

本論文では、日英語比較を通した相互行為ストラテジーのさらなる解明を目指し、英語話者と日本語話者による発話行為連鎖構成を比較・考察した。話者が社会的距離の異なる相手に対して一種の交渉型連鎖を構想する際に用いるス

トラテジーを質的側面と量的側面の両面から言語別にそれぞれ分析・考察した結果（生田 2006, 2008）を基に、量的側面に絞って比較・考察したものである（使用される表現形式および性差に関する側面は本論文では対象としていない）。

その結果、本論文で扱ったような指図型発話行為の使用を要する交渉型連鎖においては、日英語話者とも他の特定種の発話行為を用いることにより意図する指図型発話行為の FTA を緩和しようとする点は共通しており、両語ともそのような発話行為連鎖によって意図を遂行しようとするストラテジーが用いられていることを示した（ただし、用いられる発話行為の種類には日英語で差異もみられる）。FTA の度合いが比較的高いと考えられる指図型行為の遂行にあたって、日英語ともに相手との社会的距離の差にかかわらず、単に直接発話行為を避けるというストラテジーよりも、むしろやり取りのポライトネスにかかわる発話行為連鎖構成によるストラテジーが構想されていると考えられる（cf. 5.1.）。

また、日英語間で最も顕著な違いとして、そのような複数の発話行為の連鎖構成とターン連鎖との関係も考察した（cf. 5.2.）。英語話者は主として一ターンに一発話行為を実行するため、異なるターンの組み合わせによる連鎖構成により発話意図を実現しようとする。一方、日本語話者は異なるターンの組み合わせによる連鎖構成のみでなく、意図する指図型と同一ターン内で複数の発話行為を組み合わせようとすることが多い。その結果、少なくとも本研究で扱ったような交渉型連鎖では、指図型発話行為を含むターンが英語話者に比べ日本語話者の場合には長く複雑になるということが言えよう。

注

- (1) 場面 A では社会的距離が大きい対話相手として「大学で普段接する教授」、B では距離に近い相手として「兄弟姉妹」を設定。詳細は生田（2008）参照。
- (2) 以後、表中の数字は実回答数、括弧内はパーセンテージを示す。

- (3) 英語話者および日本語話者の全回答データはそれぞれ生田（2006）と生田（2008）の Appendix に掲載した。量的分析結果のうち後に生田（2007）および生田（2009）で誤植を修正したものについては本論文でも修正後の数値を用いている。
- (4) 比較を容易にするため、表 5.1.1. では生田（2006）表 5.2. で用いられたそれぞれが連鎖構成パターンを示す a~g の記号ではなく、日本語話者の分析（表 5.1.2.）で用いた方式に合わせた表記を用いた。つまり、それぞれの記号が出現位置を示す a~e に対応する A, C, E を用い、+記号によってその組み合わせパターンを示している。

参考文献

- 生田少子 2006 「英語話者による相互行為ストラテジーとしての連鎖構成」『明治学院大学英米文学・英語学論叢』第 118 号, pp. 71-121.
- 生田少子 2007 「連鎖構成にみられる性差」『明治学院大学英米文学・英語学論叢』第 120 号, pp. 177-210.
- 生田少子 2008 「日本語話者による相互行為ストラテジーとしての発話行為連鎖構成」『明治学院大学英米文学・英語学論叢』第 122 号, pp. 99-139.
- 生田少子 2009 「日本発話行為連鎖構成にみられる性差」『明治学院大学英米文学・英語学論叢』第 124 号, pp. 131-152.
- Brown, P. and Levinson, S. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Leech, G. 1983. *Principles of Pragmatics*. London: Longman.
- Leech, G. 2003. Towards an anatomy of politeness in communication, *International Journal of Pragmatics* 14, pp. 101-123.
- Levinson, S. C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Searle, J. R. 1969. *Speech Acts: an essay in the philosophy of language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Watts, Richard J. 2003. *Politeness*. Cambridge: Cambridge University Press.